

2015年9月
改訂版

PRESS RELEASE

さんちやしやみ
三茶三味 ～三味線音楽を聴く～

鶴澤清治×杉本博司

世田谷パブリックシアター公演決定

公益財団法人小田原文化財団
<http://www.odawara-af.com/>

<報道関係者様お問合せ先>

公益財団法人小田原文化財団 広報担当 稲益 Tel: 090-2640-7905 email: press@odawara-af.com

<一般のお客様からの公演に関するお問合せ先>

公益財団法人小田原文化財団 tel: 03-3473-5235 (平日 11時～17時)

<チケットに関するお問い合わせ先>

世田谷パブリックシアターチケットセンター tel: 03-5432-1515 (10時～19時)

<http://setagaya-pt.jp/performances/20151023-2779-2.html>

<最新公演情報>

小田原文化財団公式 facebook: <https://www.facebook.com/odawaraaf?ref=hl>

小田原文化財団公式 twitter: https://twitter.com/odawara_af

杉本博司通信 twitter: https://twitter.com/odawara_staff

ご挨拶

平素より小田原文化財団の活動に対し、多大なるご支援を頂きまして誠にありがとうございます。

小田原文化財団では日本の伝統芸能を様々な角度から検証し、公演を通して世界に発信できる高質なコンテンツづくりを目指しています。2011年の人形浄瑠璃文楽『杉本文楽 曾根崎心中付り観音廻り』公演を皮切りに、さまざまなプロデュース公演を国内のみならず、ヨーロッパ、ニューヨーク、シンガポール等でも実施してまいりました。

今回お楽しみいただく公演は「三味線音楽」。劇場を茶室のように置き換え、杉本博司が主(あるじ)となり、こだわりの一品と名曲で、お客様をおもてなしいたします。『杉本文楽曾根崎心中付り観音廻り』で初タッグを組み、その斬新な演出が大きな話題を呼んだ人間国宝・鶴澤清治と杉本博司が再び新しい舞台を創り出します。また、舞台の背景に登場する杉本博司作の屏風「月下紅白梅図」と長谷川等伯作の屏風「四季柳図屏風」も必見。伝統芸能の新たな魅力を多角的に体感していただける機会となりますと幸いです。

小田原文化財団

三茶三味によせて

柳は緑 花は紅 と昔の人は申しました。今さらのように、あたりまえのことがあたりまえのようにしてある、そのことにはっと気が付く。存在の不可思議に想い至ることが人生には肝要でございます。

柳に風とも申します。江戸の川柳に「気に入らぬ風もあろうに柳かな」というのがございます。いやなことがあっても風に身をまかせて争わない、憲法第9条の解釈でございます。もう一つ川柳「手折られる人に薫るや梅のはな」。梅の枝は折られても人によい香りをはこんでくれる、敗戦後の日本文化の指針でございます。

柳と梅、二曲の屏風の前で三味線の名曲の音色に耳を傾ける。近頃にはない本物の贅沢でございます。

杉本博司

<杉本博司 プロフィール>

1948年東京生まれ。立教大学卒業後、1970年に渡米、1974年よりニューヨーク在住。徹底的にコンセプトを練り上げ、精緻な技術によって表現される銀塩写真作品は世界中の美術館に収蔵されている。近年は執筆、設計へも活動の幅を広げ、2008年建築設計事務所「新素材研究所」を設立、IZU PHOTO MUSEUMの内装設計を皮切りに、oak omotesandoのエントランススペース、イセタンサローネ(東京ミッドタウン)などの設計を手掛ける。主な著書に『空間感』(マガジンハウス)、『苔のむすまで』『現な像』『アートの起源』(新潮社)。内外の古美術、伝統芸能に対する造詣も深く、人形浄瑠璃文楽公演『杉本文楽 曾根崎心中付り観音廻り』(2011)、三番叟公演『神秘域』(2011)の演出を手掛け、海外でも高い評価を受ける。今年秋には千葉市美術館にて個展開催予定。1988年毎日芸術賞、2001年ハッセルブラッド国際写真賞、2009年高松宮殿下記念世界文化賞、2010年秋の紫綬褒章を受章。2013年フランス芸術文化勲章オフィシエ章受勲。

公演概要

公演タイトル:「三茶三味(さんちやしゃみ) ～三味線音楽を聴く～」

公演日 : 2015年10月23日(金)19時開演

24日(土)14時開演

25日(日)14時開演

会場 : 世田谷パブリックシアター(東京都世田谷区太子堂 4-1-1)

主催 : 公益財団法人小田原文化財団

企画制作 : 公益財団法人小田原文化財団

提携 : 公益財団法人せたがや文化財団・世田谷パブリックシアター

後援 : 世田谷区

協力 : ロンドンギャラリー株式会社

助成 : 日本万国博覧会記念基金

空間構成 : 杉本博司(現代美術作家)

監修 : 野川美穂子(邦楽研究家)

演奏出演者: 豊竹呂勢大夫(人形浄瑠璃文楽座 太夫)

鶴澤清治(人形浄瑠璃文楽座 三味線)

鶴澤清志郎(人形浄瑠璃文楽座 三味線)

鶴澤清愼(人形浄瑠璃文楽座 三味線)

鶴澤寛太郎(人形浄瑠璃文楽座 三味線)

鼎談出演者:

10月23日(金)

山村友五郎(日本舞踊・山村流六世宗家)

いとうせいこう(作家・クリエイター)

野川美穂子(東京藝術大学講師)

10月24日(土)

尾上菊之丞(日本舞踊・尾上流四代家元)

桜井秀俊(ミュージシャン:真心ブラザーズ)

野川美穂子(東京藝術大学講師)

10月25日(日)

杉本博司(現代美術作家)

橋本麻里(ライター・編集者)

野川美穂子(東京藝術大学講師)

チケット情報

チケット料金:

- ・一般 A 席(1階・2階席) 4,500 円
B 席(3階席) 4,000 円
- ・世田谷パブリックシアター友の会: 4,200 円(先行発売期間のみ A 席割引)
- ・せたがやアーツカード: 4,300 円(先行発売期間のみ A 席割引)

※チケット情報、最新公演情報は小田原文化財団公式 HP、facebook、twitter、にて随時更新しています。あわせてご参照ください。

小田原文化財団公式 facebook: <https://www.facebook.com/odawaraaf?ref=hl>

小田原文化財団公式 twitter: https://twitter.com/odawara_af

小田原文化財団公式 HP: <http://www.odawara-af.com/>

杉本博司通信 twitter: https://twitter.com/odawara_staff

公演プログラム

1. 鼎談
10月23日(金) 山村友五郎+いとうせいこう+野川美穂子
10月24日(土) 尾上菊之丞+桜井秀俊(真心ブラザーズ)+野川美穂子
10月25日(日) 杉本博司+橋本麻里+野川美穂子
2. 義太夫節 鶴澤清治構成「三味線組曲」 鶴澤清志郎
鶴澤清堧
鶴澤寛太郎
3. 義太夫節「卅三間堂棟由来」(通称「柳」) 豊竹呂勢大夫
鶴澤清治

公演解説

「聴く」は「気来(きく)」に由来するという説があります(日尾荊山『燕居雑話』)。「気に満ちた音が耳に入って来る」、それが「聴く」であるということです。音に耳を傾け、音の息吹をとりこみ、音が鳴り響く空間も一緒に感じとること、それが「聴く」という行為と言えるのかもしれません。

今回の公演は、三味線音楽を「聴く」ことにこだわり、その楽しさを発見しよう、という催しです。三味線は、永禄年間(1558～1570)に琉球から日本の本土に伝えられた楽器と推測され、以来、歌や語りなど、人間の声とともに、楽しまれてきました。さまざまなジャンルの三味線音楽があり、それぞれに、声の表現も三味線の音色も異なります。今回取り上げるのは、大坂生まれの義太夫節。江戸時代の前期、17世紀の終わりに成立した浄瑠璃であり、音楽によって、物語の世界を生き生きと描き出します。

公演は三部構成です。第一部の鼎談には、公演日それぞれに異なるメンバーが登場し、三味線音楽のよもやま話に花を咲かせます。第二部では、鶴澤清治(人間国宝、芸術院会員)が構成する「三味線組曲」を演奏。第三部では、義太夫節の「卅三間堂棟由来」(平太郎住家より木遣り音頭の段:通称「柳」)を素浄瑠璃の形式で演奏します。数ある義太夫節のなかでも人気の高い名作を、鶴澤清治の三味線でお楽しみいただきます。

会場の空間構成は杉本博司。東京では初公開となる杉本作の「月下紅白梅図」、長谷川等伯作の「四季柳図屏風」などが舞台を彩ります。

江戸時代には、贅を尽くした座敷でも楽しまれた三味線音楽。

ここ<三茶>の世田谷パブリックシアターで、<三味>の音(ね)にじっくりと耳を傾け、空間とともに、音の魅力をご堪能ください。

◎「太棹」の技が織りなす三味線音楽の魅力

三味線には、さまざまな種類があります。本公演で紹介する義太夫節の三味線は「太棹」。棹が太く、胴も重くて大きいタイプで、厚みのある撥を用いて演奏します。太棹の魅力あふれる音色と無限の表現力を、公演の第二部では三味線のみで演奏し、第三部では太夫の声とともに聴きいただきます。

▽^{ぎだゆうぶし}義太夫節 鶴澤清治構成「三味線組曲」

義太夫節の表現の一つに、三味線のみで演奏する「メリヤス」があります。太夫のコトバや人形の動作にあしらって演奏し、特定の情景や情感を際立たせます。メリヤスの旋律には長短さまざまなものがあり、いずれも個性的で印象的。多彩な表現力が凝縮しています。

公演第二部の「三味線組曲」は、メリヤスの旋律を組み合わせて鶴澤清治が構成した義太夫節の新作器楽曲です。

▽^{ぎだゆうぶし}義太夫節「^{さんじゅうさんげんどうむなぎのゆらい}卅三間堂棟由来」(通称「柳」。平太郎住家より木遣り音頭の段)

大坂生まれの義太夫節は、竹本義太夫(1651～1714)が道頓堀に竹本座を開いて語り始めた貞享元年(1684)以来、主として大きな劇場で演奏され、人形操りとともに楽しまれてきました。かつての文楽ファンが、「文楽を見に行く」とは言わずに、「文楽を聴きに行く」という表現を使ったことに象徴されているように、音楽としての魅力は格別です。本公演の第三部では、人形遣いを伴わずに、太夫と三味線のみで素浄瑠璃で演奏します。

演奏する「卅三間堂棟由来」(平太郎住家より木遣り音頭の段)は、宝暦10年(1760)に大坂・豊竹座で初演された「祇園女御九重錦」の三段目切に基づいています。文政4年(1821)以降、三段目を独立させた上演が定着し、文章にも修正を加えたものが現在に伝わります。

人間の妻となった柳の精のお柳、夫の平太郎、息子のみどり丸の3人を主要人物として、夫婦と親子の突然の別れを描く名作中の名作です。演奏は、豊竹呂勢大夫(人形浄瑠璃文楽座 太夫)と重要無形文化財保持者(人間国宝)の鶴澤清治(人形浄瑠璃文楽座 三味線)。人間の喜怒哀楽を語り分ける太夫の技は「情を語る」と言われ、音で物語の情感や場面を演出する三味線の技は「模様を弾く」と言われます。最高の組み合わせによる演奏で、義太夫節の醍醐味をじっくりとご紹介します。

<鶴澤清治プロフィール>

1945年大阪生まれ。人形浄瑠璃文楽座 三味線。1953年、8歳で四代目鶴澤清六に入門。1964年に十代目竹澤弥七の門下となる。30代前半から13年間、人間国宝・四代目竹本越路大夫の三味線をつとめる。2004年に日本芸術院賞恩賜賞受賞。2006年に紫綬褒章受章。2007年9月に重要無形文化財保持者(人間国宝)に認定され、「三味線格」になる(三味線弾きとしての最高格)。2014年に芸術院会員。

◎舞台に屏風の名品が登場。舞台空間が美術空間に

義太夫節 鶴澤清治構成「三味線組曲」では杉本博司作の屏風「月下紅白梅図」を、また、義太夫節「卅三間堂棟由来」(通称「柳」)では長谷川等伯作の屏風「四季柳図屏風」を、背景に演奏いたします。

▽「月下紅白梅図」 杉本博司 (2014) 2曲1双／各 156.1×172.2 (個人蔵)

尾形光琳作の国宝「紅白梅図屏風」を撮りおろしたプラチナ・パラディウム・プリントによる作品。「光琳が昼ならば、杉本は夜。月が流水を照らす。梅は日中も香っていたはずだが、暗闇ではいっそう香りを放つように感じる。視覚からの情報が減る分、嗅覚が研ぎ澄まされるからだ。モノクロームにすることで情報は減少しない。別方向に拡張する」(『光琳 ART 光琳と現代美術』より抜粋)。今年2月に MOA 美術館にて発表された「月下紅白梅図」の東京初公開となる。



photo: Sugimoto Studio/ Odawara Art Foundation

▽「四季柳図屏風」(長谷川等伯) 6曲1双／各 172×378(ロンドンギャラリー所蔵)

安土桃山時代の画壇の雄である狩野永徳の最大のライバル長谷川等伯(1539～1610)。等伯は謎の多い絵師とも云われているが、等伯の画業の足跡を紐解く上で、重要な作品といえるのがこの「四季柳図屏風」。智積院の障壁画で完成させた装飾書様式以前の作品が見当たらない中、その歴史の穴を埋める作品として近年発見された。純金地に4本の柳樹、それ以外には柴垣が添えられるだけの構成。右隻には若葉を茂らせる春の柳から、風にそよぐ夏の柳が描かれ、左隻では落葉始まる秋の柳から、うっすらと雪が積った冬景色の中の柳の姿が描かれる。四季のうつろいを柳の変化で表現する。



photo: Hiroshi Sugimoto/ Courtesy of London Gallery